

コード No. 17-NPF-003

提出日：平成 30 年 5 月 15 日

平成 29 年度「個室シェルターを利用した、医療福祉生活ニーズの高いホームレス状態にある人たちへの支援」報告書

特定非営利活動法人 TENOHASI 代表理事 清野賢司

1. プログラムの目的

特定非営利活動法人 TENOHASI は、1999 年(当時は前身団体)から、池袋でホームレス状態にある方々の支援活動(月二回の炊き出し・毎週の夜回り・生活保護申請同行など)を行ってきました。

その当時、ホームレス状態にある方の数は今の倍以上で、差別偏見もずっと強かったです。生活保護を申請に福祉事務所に行っても「男性なら仕事はあるはず。病気や障がいがないければ 65 歳にならない保護は受けられません」と拒否されるというあきらかに違法な対応が当たり前に行われてきました。

そして、ようやく生活保護が受給できても、首都圏ではほとんどの場合、大部屋の民間施設(「無料低額宿泊所」といわれますが無料でも低額でもない)に入ることを指示され、プライバシーも自由もない収容所のような生活に耐えられず失踪する人が後を絶ちませんでした。

生活保護に代わる自立支援制度として「ホームレス自立支援センター」が 2000 年代の前半に始まりましたが、プライバシーのない大部屋に収容されることはわかりませんでした。

2008 年にリーマンショックが起こり、大量の「派遣切り」が行われて、その年の末には「年越し派遣村」が組織されたことから日本に貧困が存在するということが広く認識されるようになりました。

認識の広まりと共に支援の輪も広がり、2009 年には庭野平和財団を中心に各宗教の有志が集まった「2009 年越年支援連絡会」が組織されてボランティアや物資・資金・広報などの面で支援団体のサポートが行われ、翌年には「路上生活者支援連絡会」に発展しました。

また、路上生活者が路上から脱することを妨げている要因として、精神・知的な障がいのある方が相当数いらっしゃるのではないかという問題提起から、TENOHASI のメンバーを中心として 2008 年末と 2009 年末の 2 回にわたって、池袋で路上生活者に対する調査を行いました。その結果、非常に高い割合で障がいの疑いのある方がいらっしゃる事が初めて明らかになりました。



精神障がい・知的障がい・発達障がいを抱えた方の多くはコミュニケーションが苦手です。そのため健常者であっても適応するのは難しい既存の路上生活者支援施設を利用しても失踪して再路上化することが多いということもわかりました。

そこで、私たちは2010年から「路上生活状態にある路上生活者の支援プロジェクト」である「ハウジングファースト東京プロジェクト」を始めました。多団体・多職種連携で、路上脱出から住宅・医療・生活支援を行って安定した地域生活につなげると共に、その成果を政策提言して生活困窮者支援のあり方を変えていこうとする試みです。

その中でも住いの問題は重要です。過酷な路上生活で疲弊した心身を休め、次の生活に取り組む力を育むには、「安心できる住まい」が必要であることは「路上生活者支援連絡会」の会合で各支援団体からの報告でも明らかでした。「安心できるシェルターが必要」という認識はTENOHASIと庭野平和財団の共通認識となりました。

しかし、TENOHASIの活動は行政や企業からの委託や援助を受けられる内容でないため、活動資金は個人からのカンパのみです。そのため、年間500万円程度の資金で支援に当たってきました。

資金力がないために、2010年に最初に作ったシェルターはワンルームマンションでした。基本的に雑魚寝で、炊き出しや夜回りで出会った「今夜泊まる場所がない。路上生活から脱したい」という方をお泊めして、多くの方を路上脱出につなげることが出来ました。

最初の頃は、路上生活の方をご案内すると「雨露しのげてゆっくり眠れるだけでもありがたい」と感謝される方がほとんどでした。

しかし徐々に「雑魚寝は無理。ここには泊まれない」という方が増えてきました。

それはちょうど、私たちの支援対象者の中心が「元・日雇い労働者」から「路上生活状態にある障がい者」にかわっていたのと軌を一にします。障がいを抱えた方は、コミュニケーションの難しさから路上生活になってしまった方が多く、雑魚寝のストレスは路上に戻るに十分な動機になるのです。

また、相談支援に当たるのは他の仕事を持っているボランティアではなく、平日に動く事が出来る雇用されたソーシャルワーカーである必要があるということも自明でした。しかし同じく資金力

無さから、支援に当たったソーシャルワーカーは薄給の有償ボランティアでした。

そんな悩みを抱えているときに、かねて支援をしていただいている庭野平和財団より、NPFプログラムへの参加のお誘いを頂きました。障がいのある方が路上生活から脱するには、どんなシェルターが必要であるのか？ また、どんな支援があれば地域生活に定着できるのか？それを解明するために、このNPFプログラムの資金を活用して3年間の実践を行いました。

以下、庭野平和財団の助成金で雇用したソーシャルワーカーと個室型シェルターでの活動を通して見てきたことを報告させていただきます。

2. 主な活動内容・スケジュール

1,ハウジングファースト東京プロジェクト 参加団体と活動内容

炊き出し・夜回り・ソーシャルワーク：TENOHASI

日中活動・政策提言：世界の医療団

精神科グループホーム・日中活動・ソーシャルワーク：浦河べてるの家

精神科訪問看護：訪問看護センターkazoc

日中活動（パン作り）：池袋あさやけベーカリー

アパート提供：東京つくろいファンド

ソーシャルワークと医療：SWOC/ゆうりんクリニック

住宅支援：Habitat for Humanity

2, 入り口支援

①炊き出し 毎月第2/4土曜日 東池袋中央公園で

平均210人の方に温かい食事を提供。衣類などの生活必需品を配布。

生活相談・医療相談で相談し、希望者に支援を行う。

②夜回り 毎週水曜日

池袋駅とその周辺をアウトリーチし、おにぎりや手作りパン・チラシを配布。

生活相談・医療相談で相談し、希望者に支援を行う。

3,公的な制度につなげる支援

①生活保護申請支援 生活保護を利用してどのような生活を目指すか（住居・就労や日中活動・生活設計など）を相談し、その希望をかなえられるように支援する。

②自立支援センター申請支援 就労を目指す方には、就労支援の施設である自立支援センターの申請に同行し、その後も支援する。

4,安定した地域生活につなげる支援

①医療 精神科・内科 ゆうりんクリニック

訪問看護 訪問看護ステーション kazoc

②精神科グループホーム べてぶくろ(浦河べてるの家)

③ソーシャルワーク（訪問・相談・同行支援など） TENOHASI 世界の医療団 べてぶくろ SWOC/ゆうりんクリニック

④日中活動 料理教室等 世界の医療団

パン作り（手作りパンを路上生活者に提供する） 池袋あさやけベーカリー

- ⑤アパート提供 つくろい東京ファンド
- ⑥住宅支援 Habitat for Humanity

3. 助成を受けた活動の報告

2015年 (助成1年目)

まず、2014年夏に「自立生活サポートセンターもやい」理事(当時)の稲葉剛さんを中心とする「つくろい東京ファンド」が、中野区に個室の宿泊施設「つくろいハウス」を設立しました。TENOHASI に相談に来られた方も「つくろいハウス」を利用させてもらえることになり、実際に何人の方が利用されました。

また、2014年秋から「ホームレス資料センター」と協働で、豊島区で5部屋のシェアハウス「ときわハウス」を運営しました(2016年3月まで。バストイレとリビング共同・夜間は世話人が常駐)。

2015年春にはNPFプログラムの助成金を利用して、シェルター利用者の支援に当たる常勤のソーシャルワーカーを1名増員することができ、十分な支援体制を敷くことが出来ました。

それまでの雑魚寝型シェルターとの違いは歴然で、雑魚寝型では耐えられなかった多くの方がシェアハウス型シェルターから安定した地域生活につながりました。

しかし限界もありました。路上からの脱出には常に相談できる体制が必要だと考えて世話人常駐・食事も提供するシェアハウスとしたのですが、利用者同士のトラブルから失踪する人も出て、世話人がいることは解決にはなりません。世話人がお世話する必要はなくて、普通に自分の生活を営むことができる普通のアパートがあればいいのではないかと思えてきたのです。

2016年度 (助成2年目)

そこで2016年から、「つくろい東京ファンド」と協働で豊島区で完全個室型のシェルター運営を始めました。通常の民間アパートをつくろい東京ファンドが借り上げて、運営をTENOHASIが行うという体制です。当初は1カ所2室から、徐々に増やして、2017年には3カ所7室になりました。

利用者とは4ヶ月の定期借家契約を結び、その上で生活保護を申請します。路上生活状態で生活保護申請をすると相部屋の施設を紹介されますが、アパートの契約書を持参すればそこにそのまま住むことが来ます。家賃は生活保護費から払って頂き、4ヶ月の間に2名のソーシャルワーカーが聞き取り・相談をして、これからどのような生活を目指すのか、そのためにどのような社会資源を活用したいかを相談し、試行錯誤しながら新しい生活の形・どこに住み・昼間は何をして・どんなつながりの中で生活して・これから何をを目指すのか・を決めていきます。そして4ヶ月で生活保護または就労によって新しい自分の住居に移行します。

こうして、ホームレス状態から、安定した地域生活につなげていくための施設が完全個室型シェルターです。

2017年度 (助成3年目)

2017年は前年度に引き続き個室型シェルター運営を行いました。シェルターは1室増えて4カ所8室(途中、1室をご本人の希望により直接契約に切り替えたので4カ所7室)に、ソーシャルワーカーは1名増員して3人になりましたが、年度途中から産休育休と介護休のため二人が長期休業に入り、ゆうりんクリニック・べてぶくろの応援を受けながら活動しています。

今年度の特徴は医療につながる人が多かったことで、特にゆうりんクリニックの精

神科・内科に通院する方の多さが目立ちました。多くの方は路上生活で心も体も痛んでおり、じっくりとした手当てが必要です。

①高い成功率

2016~17年度の完全個室型シェルターの利用者 合計 28人

<その後の経過と現状>

生活保護や自己資金でご自分のアパートを確保された方 18人

入院された方 1人

亡くなられた方 2人

利用継続中の方 5人

失踪された方 2人

私たちの実践例はまだほんのわずかですが、シェルターを利用してご自分のアパートを確保された方と失踪された方の比率を考えると、厳密には比べられないものの欧米におけるハウジングファーストの成功率(1年後のアパート維持率が80~90%)に近い数値が出ており、日本においてもハウジングファーストが有効であることを示していると思います。

*ご自分のアパートに移られてからも相談や日中活動などで支援は継続しています。

②ハウジングファーストの実践ケース報告

「癌になっても最期は自分の部屋で・・・追悼 上野さん」

TENOHASI 会報 36号 (2017年12月) より引用

上野さんは、長く池袋で路上生活をされていました。1年少し前に体調を崩して病院にかかったところ、肝臓にいくつかの悪性腫瘍が見つかりました。その後、以下に述べるような経緯があって、TENOHASIとハウジングファースト東京プロジェクトのネットワークでアパートに入れ、約8か月間過ごした2017年7月15日、自宅で静かに息を引き取られました。上野さんは少年時代から極道の世界に生きてこられました。たしかに、と頷ける迫力がある一方、「いつも困っている人に飯を食べさせて、自分は食べなかった」と皆が口を揃えるような、シャイな優しさが感じられる人でした。

上野さんがこの世に生きた証しとして記録を残そうと思い、葬儀の席に集まった皆さんから話を

聞いてみました。

●目を赤くした若い女性の話

ホントに優しい人。人から悪く言われるようなことは一切ない。それだけは言える。

私が18くらいの頃からの知り合い。ホントに親切にしてくれた。本当のお父さんみたいだった。お墓参り行きたい。お骨はどこに行くの？形見がほしい。

●親分筋のYさんの話。

あいつはな、高松(豊島区)の生まれだよ。父ちゃんはメッキ工場を営んでいたんだ。元軍人で、めちゃくちゃ厳しい人だったらしい。でも、地元の、頭がいいけど貧乏で上の学校に行けない子の学費を出してやったりしてた。そういう点では偉いオヤジさんだよ。あいつは「俺には一文もくれなかった」って怒ってたけどよ(笑)。

19歳で地元の有名ヤクザの舎弟になったんだ。それからは、もちろん、いろいろあってな。何回か刑務所も行っているよ。でも、ホント人間はいい奴でさあ、金が入ったら、みんな若い奴におごっちゃうんだよ。そんでもって金が無くなると「Yさん、金貸してください」ってくるんだから。一回や二回ならいいけど、しょっちゅうだから参っちゃうよな。でもいい奴だから、そのたびに千円とか5千円とかやってた。

ウナギ公園(池袋駅前公園)で野宿してた頃は、若い奴が腹減らしてたら、あいつがうどんか何か買ってきて鍋一杯作って食わせてやるんだ。それで、自分は食わない。そんなことをしているから金が無くなる。それでまた俺の所に来るってわけさ、参るだろ。でも、仲間や若い者のことをいつも世話している、ホントにいい奴だったよ。なあ。

●弟分のNさんの話

怒ると怖かったですよ。やっぱりこの世界、舐められちゃいけないって言うのがありますから。舐められないように、怒るときはめっちゃ怒ってました。

でも、根はホントに優しい人でした。

●TENOHASI ソーシャルワーカー 小川の話

近年は池袋駅の西口周辺で野宿されてましたね。仲間も多い方と認識していました。

2015年の年初に具合を悪くされて池袋駅のびっくりガード下で寝ていました。出所してきて間もないとのことでした。まもなく40度の高熱が出て、トイレにも行けず「垂れ流し状態」に。

2月4日晚、TENOHASI 夜回り班が声をかけたら「診てほしい」とおっしゃったので、夜回りに参加していた医師2人と看護師1人、ソーシャルワーカー3人が現場に駆けつけました。お腹と足の付け根が驚くくらいに腫れ上がっていました。

ご本人はそれ以前に豊島区の福祉事務所に生活保護の相談に行ったそうですが、「反社会勢力の組織員でないことをまず照会する」と言われて「これは手続き上仕方ないのですが」その場で申請書を破って帰ってきてしまったそうでした。

上野さん、病院への不信感が強くて、「病院に行くと何も悪いことをしてなくても警察が来る」って。いろんな人が説得にかかったけれど、なかなか病院に行かなかったです。

それから1年ほどが過ぎて、いよいよ体調が悪くなって、生活保護を申請して、A病院に検査入院したところ、肝細胞癌が進行していました。肝硬変に加えて、悪性腫瘍が3つ肝臓に見つかりました。おまけに食道静脈瘤が27個もあって、これが破裂でもしよものなら大吐血してお陀仏です。

いったん退院して、通院治療することになった上野さんは、診断書を携えて福祉事務所に向かい

ました。アパートで静かに残りの人生を過ごせたら。そう思っていたそうです。でも、そんな上野さんに提供されたのは、1フロアに2段ベッドが1ダースも並ぶ宿泊所・B寮でした。どうにも納得が行かず、上野さんは福祉事務所の指示にはしたがわず、病身で再び野宿生活を始めました。私が直接に上野さんの支援に関わるようになったのはこの頃です。上野さんの代わりに福祉事務所へ相談に行くと、生活保護はすでに失踪廃止となっていました。「生活保護はいつでもまた申請できるけれど、戻れば宿泊所はB寮ですよ」。にべもない返事でした。そうこうするうちに、上野さんは駅構内で転倒して、C病院に救急搬送されて入院。3週間の後に退院したものの、ほとんど歩けないような状態で、嫌々ながらも2段ベッドのB寮に入所。2日後に肝臓等の治療を再開すべく、A病院を受診してみると、腰椎を圧迫骨折していることが判明して、再び入院。2週間ほどで退院して、再びB寮に入所して、2日後には再び転倒して、救急搬送からA病院に再々入院。

当時は、上野さん、着替えや身の回り品は45リットルのポリ袋やデパートの紙袋なんかに詰め込んで持ち歩いていましたので、入退院のたびに私はそれらを担いで都電で行ったり来たりしました。一昔前の漫画に出てくるコソ泥みたいな姿だったと思います。

外科的にガンをすべて取り去ることができないのは上野さんもよく分かっていて、「何もしないでください」と担当医師にきっぱり仰っていました。それでも、静脈瘤のほうは急を要するので、つらいのを耐えて、何度も内視鏡を飲み込んでの処置を受けられていました。

今度退院するときは絶対アパートで暮らしてもらいたい。HFTP(ハウジングファースト東京プロジェクト)の会議のときに、皆でそう話し合い、私たちはアパート探しを始めました。ほどなく、運良く、西巣鴨の近くの親切な不動産屋さんと大家さんに出会い、「つくろい東京ファンド」(HFTPの住宅部門を担っているNPO)代表の稲葉剛さんと相談して、アパートを法人契約しました。上野さんには、事前に部屋の写真を見てもらって、承諾を得ていましたが、病室で稲葉さんとアパートの賃貸契約を交わしたときは上野さんとても神秘的な表情で、半信半疑のようでした。それでも、その日以来契約書を手元から離すことは決してなかったです。2016年の11月初めのことです。

腰の回復が思わしくなく入院生活は予想外に長引きましたが、いよいよ退院の言葉が医師の口に上り、上野さんと私は、担当のケースワーカーさんに病院に来てもらって、アパート契約のことを話しました。

「とんでもない。こんな勝手なことをして、何かあったら誰が責任をもつのですか。そもそも、アパートで生活したいなんて上野さんは一度も言っていないではないですか。」ケースワーカーさんに強い口調でそう詰められました。私はそのときやや感情的になってしまいましたが、上野さんはいたって落ち着いていて、ただ黙っておられました。

それから、2週間ほど経って、病院に上野さん宛にワーカーさんから電話が掛かってきたそうです。そして、そのときにとうとう上野さんは自身の思いの丈を、電話口に向かって叫びました。後日、病室に上野さんを訪ねると、しょんぼりした様子で、「小川さん、やっちゃいました。アパートはもうダメですね。あの人の言うとおりにしますよ」、そう仰いました。私たちは高齢者向けの宿泊所とそれに隣接するデイサービス事業所を見学に行ったりしました。「ここじゃ無理ですよ」。上野さんの言葉はそれだけでした。

それから数日経った12月19日、退院手続きを済ませると、上野さんと私はすぐに西巣鴨のアパートへ行きました。こうなったら、「徹底抗戦」しかない。私たちの心は決まっていました。上野さんにとって初めて実際に目にする「自分の」部屋を満喫する間もなく、アパートから福祉事務所へ直行。「それで、どうしますか」。黙したままの上野さんにケースワーカーが続けました。「いま他に行くところがないですから、アパートに行くしかないですね」。あまりに拍子抜けの展開に、狐につつまれたようでした。福祉事務所から西巣鴨への帰り道、車いすを押す頬にあたる師走の風は冷たくて心地よかったのを覚えています。上野さんも笑顔でした。

翌日、介護保険のケアマネさん、ヘルパーさんらと顔合わせがあって、空っぽだった部屋は、お正月を迎えるまでに、「上野さんの部屋」になっていきました。

お酒は好きでしたよね。主治医から断酒を約束させられていたのですが・・・そりゃそうですよね、飲んだらいつ静脈瘤が破裂するかわからないんですから。でも上野さん言うことを聞かない。先生もそれはご存知でしたけど。

ワンカップ大関がおきまりでした。大の甘党でもあって、「饅頭で一杯やれますよ」と言うのを大げさだと思っていたら、訪問したときにクリームパンを肴にワンカップをやっていて、びっくりしたことがあります。何度かあった病院からの退院同行のさいも、福祉事務所訪問が済むと食堂に直行して、料理が出るまでに生ビールのジョッキを干して、冷酒を注文。料理はほとんど手つかずのまま、くいつと行っちゃう。まるで水を飲むみたいに。あんな飲み方をする人は見たことがない。それで、いくら飲んでも顔色一つ変わらない。それで夕方までにちゃんとB寮に収まっている。

区役所でアパートへの住所変更の手続きを済ませた後に、お祝いしようということで遅い昼食をご一緒したんです。上野さんは大きな車いすだったので、12月末だったけど、通りのテラスに二人で陣取りました。ちょっとしたコース料理になっていて、コンソメスープがまず出てきて、上野さん「うまい！」って。メインの肉料理もさることながら、サイドのマッシュポテトがクリームのように滑らかで、上野さんはとても感心したようでした。それで、ナイフとフォークでの食事が済んで、上野さんは紅茶を注文したのですが、一口啜ったところで目を閉じてられる。「そうだな。紅茶っていうのはこういう香りがするもんだよな。缶で飲むのとはまるで違う。こんな紅茶は何年ぶりだろう」って、10年くらい前に新宿で飲んだ紅茶の話をしてくださいました。よく晴れた冬の午後で、落ち葉がひらひらと舞い落ちて、向こうには都電が走っていて、なかなかロマンティックでした。

都電と言えば、大塚駅前で肩を並べてラーメン食べて、味の批評をし合ったこともありました。アパートでも、少ない食材を器用に使って、おいしそうな料理をよく作っておられましたね。

上野さん、アパート入居後も短期の入院を繰り返しながら、そこそこ元気だったんです。さびしくなったら、シルバーカーを押して西口公園のお仲間へ会いに行く。で、会うと皆におごる。帰りは疲れるからタクシー。ご本人は「行くと、お金がなくなる」とか愚痴るのですが、さびしいからやっぱり行っちゃう。うなぎ公園(池袋駅前公園の通称)のことを上野さんは「うなどこ」って呼ぶのですが、愛おしげな響きがありましたね。

●TENOHAS I 事務局長 清野の思い出。

私が上野さんと会ったのはほんの数回です。去年の夏、猛暑の西口公園で上野さんを病院に連れて行こうとして、小川さん、中村あずささんと一緒に探したけど、その時は見つかりませんでした。

アパートに入られてからは何回か会いました。洗濯機を届けたりして。

最後に会ったのは6月4日かな。訪問したら、元気なおばちゃんヘルパーと一緒にシーツを干していました。「シーツはこうやって干した方がいいですよ、上野さん」「いや、こっちの方が乾く」とか論争していて、とても楽しそうでした。部屋の中もきちんと整理されていて、普通に生活されていましたよ。

さすがにその後は疲れたようで介護ベッドで休みながら話をしたんですが、「人生の最後に自分のアパートに住めてホントに落ち着く。集団生活の施設とかだったら絶対に無理。小川さんには感謝している」と繰り返していました。

●小川の話に戻ります。

6月中旬の受診の際に、腫瘍が大きくなってきていて、肝臓を突き破るようなことがあれば大出血するし、残っている静脈瘤が破裂すればやはり大出血するので、いつ急変してもおかしくない、もう一度入院して処置を受けてはどうかと、主治医から告げられました。当初は、何もしてもらわなくて構わないと口にしていた上野さんですが、やはり心細かったのでしょうね。「先生の言うとお

りにする」。そう言って、7月1日に入院されました。ところが、入院直後から高熱が出て、数日中には肝性脳症といって毒素が分解できず意識が混濁する状態となり、主治医からケアマネさんや私にも電話がありました。このまま上野さんに会えなくなってしまうのではと憂慮していたところ、モルヒネ注射で痛みが和らぎ、意識も戻ったのです。「肝臓で入院してるのに、なんで心電図なんか取るのか」そう言って、ワイヤを自分で外してしまうくらいにまで状態は改善しました。

しかし、病院としては、この期に及んで命の危険を伴う処置を行うことはできないということで、アパートへ帰りたいという上野さんの希望をかなえる形で、7月11日に退院の運びとなりました。ケアマネさんの迅速な手配で、訪問医師・看護師も決まり、「看取り」の体制が敷かれました。

上野さんも、そのことはよく分かっていらっしやいました。ただ、この間の急な展開には不安を感じていたのでしょう。「まいったなあ。まいっちゃったなあ。そう呟やく上野さんの姿が忘れられません。それでも、生来の明るさから、「こんな美人の看護師さんたちが部屋に来るようになるよね、おれも男ですからね。分からないですよ。まずいですよ」などと冗談を飛ばしていらっしやいました。

退院翌日の7月12日には、刺身とビールが飲みたいとヘルパーさんにリクエスト。ヘルパーからダメが出ると激高。驚いたヘルパーさんが看護師さんから許可をもらって、酒肴を用意して、大好きなマグロの刺身を一切れとビールをコップ半分ほど口にされたそうです。

7月14日には、長く上野さんを支援してきたTENOHAS Iの坂内さんがお見舞いしました。上野さんは夜が不安らしく「泊まってほしい」と洩らしたそうです。テレビの『相棒』を見て、狂言自殺の場面に「あーっ」と大声を上げられたとも。

そして、翌7月15日の朝、看護師が訪ねたときには、すでに呼吸が弱くなっていて、まもなく静かに息を引き取られました。1時間ほど後に私もアパートに到着しましたが、とても穏やかなお顔でした。知らせを聞いて駆けつけたヘルパーさんが手を握ってお別れをされました。「あたしは泣かないよ」、そう言いながら目頭を押さえていらっしやいました。

7月30日の午後、上野さんのご遺体は、江戸川区の火葬場で荼毘に付されました。元ホームレスの人のお葬式はほんの数人の支援者が参列するだけの寂しいものであることが多いのですが、上野さんのお葬式には、仲の良かった皆さんがたくさん集まりました。

上野さん、今頃は天国でワンカップを飲み干しているでしょう。

お酒好きの上野さん。

怒ると怖い上野さん。

いつも仲間におごって自分はすっからかんの上野さん。

ご自身が望まれたように、ご自分の家で逝かれました。

見事な最期だったと思います。

(小川芳範 清野賢司)

4. 活動の成果

「ハウジングファースト 住まいから始まる支援の可能性」稲葉剛・小川芳範・森川すいめい編 山吹書店 2018年
*ハウジングファースト東京プロジェクトメンバーの編著です。

5. 今後の課題

<政策提言>

現在路上生活を継続されている方の多くは生活保護などの公的施策を利用した経験があります。そこで行政から紹介されて入所した施設の劣悪さ（相部屋または狭すぎる個室・虫のはびこる不潔な環境・生活保護費のほとんどを吸い上げられる料金など）に憤り、「もう生活保護は受けない」「施設ならいかない」と多くの方がおっしゃいます。実際、コミュニケーションに課題のある方が施設に行ってもほとんどの場合は即日または数日のうちに失踪しています。

そのような方に「普通の個室アパートなら利用されますか」とたずねると「それなら利用したい。でも無理だよ」という答が返ってきます。いままでの施策に「路上から直接個室のアパートへ」という男性向けメニューがほとんど皆無(大都市圏では。地方では逆に施設がないので直接個室アパート入居というケースが多い) だったからです。

そのような方のニーズを満たすのが「ハウジングファースト」事業です。まず「安心できる普通の住まい」を、さらに必要な相談支援を提供する、欧米でその有効性が証明されているこの支援手法が日本でも有効なことは、庭野平和財団の助成を受けながら進めた私たちのパイロット的な実践です。すでに明らかであると考えています。

日本でもハウジングファーストを国家施策として取り入れることが必要だと私たちは考えています。しかし、これがひろく福祉と行政に認められるには学術的な分析を行いしっかりしたエビデンスを示す必要があります。しかし今までは、次々と現れる要支援者の対応に忙殺されて、政策提言と、そのベースとなるデータの積み重ねと解析まではなかなか手が回っていませんでした。

そのため、2016年度後半から「ハウジングファースト東京プロジェクト研究チーム」を立ち上げ、専門の研究者と現場のソーシャルワーカーが手を組んで社会学・医学・公衆衛生・福祉などの視点から研究を進めています。2018年からは本格的に研究活動が開始されました。その成果を今後の政策提言に行かしていく予定です。